

## 2020年5月24日 主の昇天・説教要約

(マタイ 28:16～20)

司教 ミカエル松浦悟郎

私は子供のころ、空想少年で聖書の出来事を実際はどのようなようだったかなどを想像したものでした。今日の主の昇天は特に想像力をかきたてるものでした。イエスはどのようにして天に昇っていったのだろう、雲に乗っていったのか、そのままスーッと上がっていったのか、天使たちが迎えに来ていたのか、などです。もう少し大きくなると、素朴な疑問が沸いてきました。イエスが天の昇っていったなくなったのにお祝いするのだろうか。よく似ている話は竹取物語ですが、かぐや姫が月に戻っていくとき、皆は何とかそれを阻止しようと頑張ったが結局かぐや姫は去っていくという悲しい話です。同じように、去っていくイエスに対して弟子たちはどんな気持ちだったのだろうか、かぐや姫の話と重ねてしまったのです。

もし、今、同じような質問をする子供たちがいたら、次のように説明してあげようと思います。

まず、「イエスは見えなくなった」ということの意味が大切なことで、「どのように天に昇ったのか」という現象ではないのです。イエスは復活したとき神の栄光に入れ、すでに父と共におられるのです。その意味では、復活の時点で昇天していると言えるのです。しかし、イエスは復活した後、しばらくの間、あえて見える姿で弟子たちの前に現れました。そして、弟子たちと一緒に食べたり過ごしたりしましたが、それはイエスが本当に復活し共にいることを弟子たちに信じさせるためでした。そのことによって、イエスと出会った弟子たちは復活の信仰を持ちましたが、それだけでなく、イエスを直接見なかった人も、信じた人たちの信仰を見て信じていったのです。そして教会の信仰となっていきました。40日間というのは、そのために必要な期間だったのです。

弟子たちは、イエスが本当に復活し、どんなときにも自分たちと共にいることを信じた時に、もはや肉眼で見る必要がなくなりました。つまり、身体的に見えるとか触れられることで信じるのではなく、信仰として見えなくても共にいることを確信できたということです。第一朗読の中で、白い服を着た人が、「なぜ、天を見上げているのか、…あなたがたが見たのと同じ有様でまたおいでになる」というのは、そのことを表しています。

昇天の出来事は、「自分の外にいるイエスを見る」ことから、「自分の中に入る、つまり見ないでも信じる信仰」へと変わった、その区切りの時という意味を持つのです。その区切りがはっきり分かる何かの出来事があったに違いありません。それが「昇天の出来事」として書かれているのです。実際はどうであったかを考える必要はないです。

昇天にはもう一つの意味があります。それは、私たちもこの世に居ながら天と結ばれたということを示しているということです。

今日のマタイの福音でイエスは「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と言われました。復活によって私たちと完全に一つになったイエスが天に昇るということは、この地上の私た

ちも共に天に昇る、すなわち天と地が一つになったということです。もちろん、この地上では私たちはまだ罪の中にいて、互いに争い、傷つけあっています。それでも神はこの世を愛し、あなたがたを一人にはさせない、共にいると約束され、天と地が一つになってこの地に神の国が実現するように関わり続けるということです。

使徒信条の中に、「聖徒の交わり」という言葉があります。聖徒というのは、神のもとに集う天の教会、すなわち、聖マリア、天使、諸聖人、そして亡くなった人たちのことです。地上の教会と天の教会は、一緒になってこの世のすべての人の救いのために祈り合い、働いているのです。

私はこのことを、司祭、司教叙階式の時に強く感じました。叙階式の中で諸聖人の連願というのがありますが、歌われている時、受階者は床の上に完全に伏して祈ります。多くの信徒や司祭たちが祈ってくれているのが聞こえるのですが、その連願では天にいる諸聖人、すなわちマリアや天使聖人の名前がずっと呼ばれるので、まさに天の教会のメンバーも一緒に祈ってくれていることを感じました。このことは、司祭だけのことではなく、すべての人が天の教会との交わりの中にあることのしるしなのです。洗礼式のときも、同じように諸聖人の連願があります。一人の人が洗礼によって神のいのちに結ばれることを、地上の教会だけでなく、天の教会も同じように祝っているのです。

地上の教会と神のもとにある天の教会が一つになって祈り、働いているのは、この世のすべての人の救いのためなのです。その意味でイエスの昇天は、すべての人のための出来事でもあるのです。

主の昇天という出来事の中に、このような意味が含まれていることを知ったら、今日の答唱詩編にあるように「主は昇られた、喜びの叫びのうちに」と心を込めて歌うことができると思います。

純心聖母会(名古屋修道院)